

近代彫刻の先駆者。「女」「北條虎吉像」は重要文化財に。

荻原守衛(碌山)(おぎわらもりえ(ろくざん)) 穂高矢原(やばら)出身
 〈守衛が活躍した時代〉 1879年(明治12年)～1910年(明治43年)享年31歳

明治										昭和		
12	32	34	36	39	41	42	43	42	43			
穂高矢原に生ま	上美術家志して	究渡ニを米ユ洋画の研	らニパリヨークか	決心する。うと	刻家人をの「考彫え	ロダン「考える人」	礎「パリの彫刻家」	品。北條虎吉像を出品	「女」が完成。	吐血。永眠。	中村屋の一室で	定重初近指が「北條虎吉像」

人間の内面にあるものを表現しようとした彫刻家



守衛(碌山)は絵画の勉強をしていましたが、パリ留学時代、ロダンの「考える人」に心動かされ、彫刻家になる決心をしました。ロダンの作品を見たり、直接会ったりして、モデルと作者、互いの動きの中で生きている姿をとらえ表現すること、静止しているポーズの中にも動きがなくてはならないことを学びました。

碌山の作品

- パリ留学時代 「女の胴」「坑夫」
- 日本に戻ってきてからの作品
 「文覚」「デスペア」「戸張孤雁像」「労働者」「爺」「小児の首」「香爐」「灰皿」「宮内氏像」「銀盤」「北條虎吉像」(重要文化財)
 「女」(重要文化財)

もっとリアルなもの、もっと人間の内部に目指す生命力を求め続けて

心魂打ち込んだ絶作「女」



相馬良(黒光)への思いに悩む自分自身の苦悶、愛情と理性の間に苦悶している女性の苦悶を像に刻もうと考え制作に取りかかりました。

寒い冬の間、作りかけの「女」の像を凍らせないように、着物や毛布などを掛け、自分は寒さに震えていました。

大地についた膝から、腿、腰、胴、胸、首、頭へと伸びていくリズムカルな動きの美しさ、天に向かって何かを訴えかけているようなポーズから生まれてくる悲しみ、内にたたえられている清らかさが見る人の心に迫ります。

顔は相馬良に似ていると言われている。良への思慕がこの作品に表れているのでしょう。

【碌山美術館所蔵】

心を無心にしモデルと向き合った「北條虎吉像」

自分の情感だけではいけない。まずは相手の性格をしっかりととらえなくてはいけない。対象であるモデルに溶けこんでその人がもつ生命を求めなければいけない。そう考えながら制作に打ち込みました。

形だけを表現するのではなく、心やその人の性格も表現したいと考えていたのです。

【碌山美術館所蔵】



力強さを表現するために左腕、両足を取り去った「労働者」

最初は手足をもぎ取られた姿ではありませんでした。完成した作品そのものの構成の弱さが気に入らない、両手、両足に囲まれた空間がどうしても間が抜けていると感じ、不満を感じていました。

文展出品後、碌山自身で左腕を取り、次いで両足を取り去ってしまいました。その方が作品の調和がとれると考えたのです。

【碌山美術館所蔵】



【参考文献】

- 安曇野市HP「安曇野市ゆかりの先人のたち」
- 「花美術館 vol.8」(株)花美術館
- 「碌山 愛と美に生きる 彫刻家荻原守衛」(財)碌山美術館、南安曇教育会
- 「荻原碌山」南安曇教育会
- 「美と愛のたたかい 近代彫刻の父・荻原碌山」塚田正公・著 岩崎書店



【碌山美術館】